番組「愛と悲しみの“こだまでしょうか”」を見て

障害者関係のイベントのスローガンやその案内ビラに、金子みすゞの詩「わたしと小鳥とすずと」のワンフレーズ「みんなちがって、みんないい。」だけが引用されているのをよく見かける。

思い過ぎかもしれないが、バリアは社会や周りの人々の心が作り出していることを顧みずに、ただ「みんなちがって、みんないい。」と云うのみでは、障害者に「自分に障害のあることをまずは納得するように！」と一方的に云っているように聞こえ、こうした使用事象に若干の違和感を感じていた。

先日「愛と悲しみの“こだまでしょうか”～大正の詩人・金子みすゞの秘密～」と題する生涯を取り上げた番組を見た。

みすゞは複雑な家庭環境の中で育ち、その寂しさから本に親しみ、詩を作り当時の児童文学雑誌に投稿して中央でも詩人として認められたが、あくまで一主婦として子育ての中で作詩を続けたが夫婦中不和から唯一の心の支えであった作詩さえ夫から嫌われ、ついに結婚生活の破綻から我が子を手放すことに苦悩し、２６歳の若さでこの世を去り、詩集が出版されたのは死後半世紀立ってからとか（生涯の詳細や詩のいくつかは、ネット検索で見られますので、ここでは省きします）。

みすゞの詩は、寂しさの中で培われた人が気づかない事象に優しく慈しみの目線、感性からの詩だっただけに、当時の文壇の中央で与謝野晶子に並ぶ詩人とまで評価されたよう。

３月の大震災後も公共広告機構の CM でみすゞの詩「こだまでしょうか」が繰り返し流れて、益々みすゞの詩が注目されるようになった。

この詩「こだまでしょうか」も、「優しく話しかければ　優しく相手も答えてくれる」ように、「まずは自らから優しく声をかけしましょう」と云うメッセージが込められたものだけに、震災後人々の共感を呼んだものと思う。

振り返って、障害者に単に「みんなちがって、みんないい。」と云うだけでなく、何かの基準を決めて競わず、それぞれが個性があり優劣無くそれぞれが素晴らしいというその「ちがい」を双方向的に我が身にも認める優しさと慈しみの目線、感性が大事だということが、詩「わたしと小鳥とすずと」からのメッセージでないだろうか。

これだけのことが詩の短いフレーズに表現されているからこそ、詩「わたしと小鳥とすずと」が多くの人々の共感を呼んでいる思う。

阿部幸泰　　（2011 年 10 月 22 日　記）